

平成 21 年 6 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（B）（海外学術）
 研究期間：2005年度～2008年度
 課題番号：17402036
 研究課題名（和文） 戦乱による子どもの心的外傷に関する調査研究
 - 東ティモールにおける孤児の実態調査 -
 研究課題名（英文） A research on psychological trauma of children by war-torn
 - Investigation of orphans' actual conditions in East Timor -
 研究代表者 文珠 紀久野 (MONJU KIKUNO)
 山梨県立大学・看護学部・教授
 研究者番号：70191070

研究成果の概要：

2002年に独立した東ティモールにおける戦乱孤児の心的外傷の実態を把握するために、心理面・身体発達・健康面から調査を実施した。生活の安定と共に身体発達・健康面に若干の改善が見られてきているが、心的外傷が慢性化し、不安感、空虚感と共に、不安定な感情状態に陥っている子どもも多くみられた。また、他者に対する不信感、人間関係を形成することへのためらい等の問題が解消し得ないままに残っていることが見出された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	5,000,000	0	5,000,000
2006年度	2,700,000	0	2,700,000
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
総計	13,400,000	1,710,000	15,110,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：

心的外傷・戦乱・孤児・東ティモール・統合型 HTP テスト・健康調査

1. 研究開始当初の背景

ポルトガルによる植民地支配から独立した直後、インドネシアによって占領された東ティモールは、長い厳しい時代を経て2002年に独立をした。占領下にある間、東ティモールでは住民の虐殺、女性への性的虐待が頻発したといわれていた。また、1999年独立を問う住民投票の結果が判明した後、東ティモール全土の約80%が破壊され、多くの子どもが親を失い、子ども自身も生命の危険にさらされる状況であった。その結果、孤児となり孤児院で暮らすこととなったが、

種々の心理的問題、対人関係上のトラブルを引き起こしているといわれていた。その背景の一つには、親が拷問を受ける場面を見聞きしたこと、親や知人の虐殺や、母親や姉妹がレイプされる場面に遭遇したことによる心的外傷によるものではないかと思われた。特に、1999年9月、親と共に安全を求めて避難した先で、突然の機銃掃射によって親が眼前で殺害される状況に遭遇し、自分自身も生命の危険にさらされたことから生じたPTSDによるものではないかと考えられた。さらに、多くの住民は紛争を避けるために山岳

地帯に避難せざるを得なく、食料不足による飢餓状態におかれることにもなった。その影響による健康被害も生じていると考えられ、早急に状況を調査しなんらかの回復を図るための方策を検討する必要性から調査を実施することとなった。

2. 研究の目的

戦乱状況に遭遇し、親を亡くし生活基盤を失った子どもが受けた心身への影響の実態調査を元に、戦乱が与える影響を検討することが主目的である。

- (1) 東ティモールの子どもの心理的状況に関する実態調査を元に、戦乱が与える影響を検討する。
心理面における影響を検討する
身体発達・健康面に与えている影響を検討する
- (2) 心的外傷を負った子どもに対する心理的治療の可能性を探る
- (3) 東ティモール国内に戦乱による心的外傷回復のための相互支援体制を確立するために、スタッフ養成のあり方を検討する

3. 研究の方法

(1) 予備調査(2005年)

実態把握を実施するための方策の検討：心理面の把握のために文化や言語の影響の少ないツールとして統合型 HTP テストを採用することとした。身体・健康面の把握のために、身体発達状況、栄養状況を把握可能な検査項目を検討した。

調査対象者把握のため、東ティモール国内にある孤児院情報を得、12箇所(1箇所)の孤児院と障害児を教育している学校の調査協力が得られた。

- (2) 調査対象：東ティモール国内にある孤児院 12箇所(首都 Dili 5箇所、西部地域 2箇所、東部地域 1箇所、南部地域 2箇所、山岳地域 2箇所)で生活している孤児 約 450名(2歳~20歳)及び障害児 8名(7歳~25歳)

(3) 調査方法

心理面に関して：統合型 HTP テストを実施。「家、木、人を入れて何かしているところを描きなさい」のインストラクションを行い、A4画用紙に鉛筆で描くように指示した。描いた絵に関して、一人一人にインタビューを実施し、描かれた内容の確認を行った。さらに、「孤児院に来ることになったきっかけ」、「家族状況」等のインタビュー面接を実施した。フラッシュバック等への配慮
面接によってフラッシュバック等の心理的ダメージが生じないように配慮すると共に、孤児の気持ちを受容しつつ面接

を実施した。

身体・健康面に関して：身体発達状況を把握するために「身長・体重・頭囲・胸囲」を計測した。健康状態把握のために「視力・握力・肺活量・尿・歯・皮膚・脊柱・耳鼻咽喉頭・目」の検査を実施した。女性には「月経」に関してインタビューした。

孤児院スタッフへのインタビュー：現在の一人一人の孤児の様子、孤児院入所のきっかけ、孤児となった背景、家族状況に関してインタビューを実施した。

(4) ワークショップ

対象：孤児院スタッフ 24名

内容：「PTSD とは何か」、「PTSD の症状」、「種々の心理的問題への対応方法」に関する研修、「リプロダクティブ・ヘルツ」、「歯の健康」に関する講義

スタッフ相互の関係形成を図るため、孤児院が抱えている問題、子どもへの対応に関して情報交換を実施した。

(5) 倫理的配慮

調査実施に関して：孤児院の責任者に調査目的等を説明し、了解を得た。また、個々の孤児に対しては、口頭での説明を行い調査協力の了解を得た。

調査結果の取り扱いに関して：調査データの保管は鍵のかかる保管庫に保管し、移動時には厳重に封をした鞆を使用した。

4. 研究成果

(1) 心的外傷の実態

統合型 HTP の描かれ方：2006年以前において、約 80%近い孤児は「家、木、人」が羅列的、静的に描いていた。「家」はドアや窓が閉鎖されていることが多く、他者との関わりを拒否、あるいは他者との関係形成から逃避していることが伺われた。また、家の外観だけしか描かれず「空虚な家庭」、「家族不在」の状況が表されていた。現実の自己像である「人」は、単線で描かれていたり、バランスの悪い人物像が多く、曖昧な自己像、不確かな自分、自信のない自分と捉えていることが示唆された。無意識の自分を表すといわれる「木」においては、「切り取られた枝」、「穴のあいた幹」、「枯れた枝」、「切り倒された木」が多くの孤児によって描かれ、心的外傷が存在していることが伺われた。また木自体も小さく、自我の萎縮があること、落ち葉・落下している実や枯葉によって悲哀感や喪失感が強いことも伺われた。

縦断的調査結果：12箇所ある孤児院

の中でも、眼前で親を殺害される場面に遭遇し、孤児となった子どもが入所している孤児院(男児 15名、女児 15名、2002年当時の平均年齢 9.7歳)において、心的外傷の状況とその後の変化を検討した。2002年の独立を果たした時点では、約60%の孤児の絵に「切り取られた枝」などの心的外傷を伺わせる内容が描かれていた。その後、2003年には45.0%、2004年には36.9%、2005年には39.9%と若干の減少はみられるが、十分に心的外傷が回復してはいかないことが判明した。また、枯れた木、落ち葉などで示される悲哀感や喪失感、閉鎖ドアや閉じられた窓から示唆される対人関係における不安感、拒否感には変化がみられなかった。つまり、心的外傷が慢性化していること、対人不信が強く存在しているのではないかと思われた。

統合型 HTP に描かれる項目数を検討すると、人物数に関しては、2003年には1.55、2004年には1.60、2005年には1.63と増加していることがみられ、家、木、人が羅列されている絵から何らかの動きを反映する絵と変容していること、花壇、鳥、井戸など種々のアイテムが描かれ内容的に豊かになってきていることが見出された。これは、独立直後の紛争状態が解消され、孤児院での生活が保障され安定してきたことからの影響によるものではないかと考えられた。

2006年3月には再度紛争が勃発した。放火、投石等によって、孤児たちは危機状態に陥り、外出が不可能となり、避難せざるを得なくなった。その時の統合型 HTP では、悲哀感、恐怖感が強く表現され、以前の PTSD が再燃していることが伺われた。

(2)身体発達面の状態：3～21歳までの孤児124名(孤児院入所期間 1～14年 平均2.7年)の身体・健康調査から、日本人との比較において、身長に関して、男性はどの年齢においても低身長であり、特に18歳で-18.5cm、16歳で-17.0cm、12歳で-14.2cmであった。女性においてもいずれの年齢でも日本の児童よりも低身長であり、13歳で-16.5cm、12歳で-13.7cm、9歳で-15.2cmとかなり低い状態であった。

体重に関して、男女ともどの年齢でも日本の児童よりも低体重であり、特に、男性16歳では-17.6kg、13歳では-17.8kgとかなり低く、女性においても、16歳で-14.2kg、12歳

で-13.9kgであった。栄養状態を示すカウプ指数、ローレル指数から痩せあるいはやせ気味と判断される子どもが約33.8%みられた。低身長、低体重ともに過去の栄養状態の劣悪さから生じた影響と考えられた。

さらに、握力や肺活量が低値であり、体力面の問題をうかがわせる結果がみられた。

健康状態に関しては、多くの子どもに虫歯がみられた。これは、医療機関が少ないこと、医師不足、歯ブラシの不足によるものではないかと思われた。

(3)心理的治療の可能性

個々の子どもに対して統合型 HTP 実施後に面接を行ったことによって、過去の経験を語ることで心理的回復を図る1手段となりうることが示唆された。特に、カウンセリング的面接を通して孤児と関係を樹立し、孤児の語りを十分に傾聴することの効用が示唆された。

また、孤児院スタッフへのワークショップを実施したことにより、子どもへの関わり方が変化し、そのことによって、子どもが安定してきていること、子ども間の喧嘩の減少が孤児院スタッフから報告された。このことより、細やかな面接と、孤児院スタッフが孤児と関わる方法の伝授が重要であることが示唆された。

(4)ワークショップ実施による成果

ワークショップを実施することにより、孤児院間で関係を形成でき、相互に情報交換が可能となり、相互に援助しあう関係が築かれてきている。

(5)国内外における位置づけとインパクト

戦争による心的外傷に関する研究は主として兵士が対象となっている。

戦乱下にある地域の子どもたちに種々の心理的問題や健康被害が存在していることは、これまでさまざまな形で指摘されてきた。しかし、その実態に関して十分な調査は実施されず、感覚的、感情的な報道によるものでしかなかった。本研究は、その実態を心理面と健康面から、心的外傷がどの程度生じているのかその実態を調査するだけでなく、年月が経過しても心的外傷は慢性化し解消されがたいことを明らかにした。

さらに、文化社会的背景が異なっても心的外傷を検討するツールとして三澤直子氏による統合型 HTP テストが有効であることを検証したことによって、今後戦争・紛争によって被害を蒙る住民の心的外傷を知る手がかりが得られたことは意義あることであると思われる。

本研究が戦乱・紛争による PTSD 研究の端緒となったこと、心的外傷を検討

するためのアプローチを見出したことにより、国際的にも注目されている研究であるといえる。

(6)今後の展望

子ども時代に受けた PTSD が成人後に及ぼす影響の経過把握の必要性

東ティモールでの実態調査を実施する過程で、1991年サンタクルス墓地で生じた争乱での生き残りの人たちに現在も強い心的外傷が存在していることが見えてきた。成人となった彼らがどのような心理的状态にあるのかを早急に把握し、何らかの対応の必要性が叫ばれている。そのために、実状を調査すること、回復へのアプローチを探索することが今後重要となってくると思われる。特に、子ども時代に戦争や戦乱・紛争に遭遇し、成人となった住民への回復プログラムを開発することにより、彼らの心理精神的安定が図れるだけでなく、次世代育成に及ぼす悪影響を防止することに繋がるのではないかと思われる。

身体発育状態の把握

東ティモールの孤児において、低身長、低体重、痩せが見いだされたが、同国の家庭で育成されている子どもとの比較検討と同時に、類似の民族との比較検討をすることにより、過去の飢餓が及ぼす影響をさらに精密に検討出来るのではないかと思われる。

戦乱による PTSD の解消を図るアプローチの探索

今回の調査を通して、カウンセリング的面接の有効性が示唆されたこと、ワークショップを通して PTSD について知識を得、孤児たちが示す問題行動の意味を理解したことによって、スタッフ自身が心理的に安定した対応ができるようになったことから、個々の子どもへの対応方法だけでなく、子どもを養育する大人への対応方法の有効性を検討する必要があると思われる。

統合型 HTP で絵を描く事自体に PTSD の回復効果があることが示唆されたことより、非言語表現方法が有効に働く可能性が考えられる。その1方法として箱庭療法が考えられる。特に絵を描く事への抵抗感の強い成人には箱庭療法が活用出来るのではないかと思われ、今後検討する必要があると考えられる。

今回検討ができなかったピアカウンセリングに関して、その効果を検討していきたい。

東ティモール人による相互援助関係システム創り

本研究では、ワークショップを開催することによって東ティモールの孤児院スタッフ間の相互援助関係を形成しようとして試みた。

今後、援助関係を形成するためには専門のスタッフの養成、孤児院スタッフ間のネットワークの形成が必要になってくると思われる。

これらを実現するための方策を検討する必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

文珠紀久野：戦乱が子どもに及ぼす継続的影響、季刊東ティモール、査読無 vol 31,20-23,2008.

文珠紀久野・文珠幹夫：東ティモール国内の抗争が子どもに与える影響、季刊東ティモール、査読無 23,14-18,2006..

[学会発表](計 2件)

Monju Kikuno & Monju Mikio: The Impact of War on Children -A study of War Orphans in East Timor, World Association for Infant Mental Health 11th World Congress, 2008.8.2. パシフィコ横浜.

小尾栄子・文珠紀久野・伏見正江・文珠幹夫：東ティモールにおける孤児の身体発育に関する実態調査(第1報)、第54回日本小児保健学会、2007.9.21.群馬県民会館.

[その他]

報道関連情報

1. 新聞記事

- (1)2008年2月1日 山梨日々新聞 「東ティモール紛争写真でつめ跡紹介 - 県立大で文珠さん姉弟」
- (2)2007年2月17日 山梨日々新聞 「戦争孤児の現実知って」
- (3)2007年2月17日 朝日新聞 「東ティモールの独立後「知って」」

2. 広報誌

- (1)文珠紀久野：東ティモールの子どもたち - 戦乱孤児の調査から -、山梨県立大学地域研究交流センター ニューズレター、2009年2月19日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

文珠 紀久野：山梨県立大学・看護学部・
教授

研究者番号：70191070

(2) 研究分担者

伏見 正江：山梨県立大学・看護学部・
准教授

研究者番号：30279898

小尾 栄子：山梨県立看護大学・短期大
学部・助手(2005~2007)

研究者番号：80369503

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

文珠 幹夫：大阪東ティモール協会・
代表